

第2回 CS-NET サロン開催報告

研究支援委員会 委員 増田 洋介(健康科学大学/立命館大学大学院)



2023年3月3日(土)の14時から16時まで、第2回CS-NETサロンがオンラインで開催されました。今回は「論文執筆～投稿から論文掲載までの苦悩と戦略～」をテーマに、第1部では参加者がグループに分かれて意見交換し、第2部では本学会機関誌編集委員会委員長の坪洋一先生(東京都立大学)をお招きして特別講演をしていただきました。

今回の参加者は66名で、まだ査読雑誌への論文投稿の経験がない方から、これまで査読に通ったり落ちたりした経験が何度もある方まで、さまざまな初期キャリア研究者の参加がありました。ちょうど査読に落ちて心が折れていたところに今回のテーマのサロンが行われることを知り、もう一度自分を奮立たせたいと思って参加したという方もいました。

第1部の意見交換では、論文の書き方や魅せ方が難しい、自分の意図をどう表現すれば伝わるかわからない、査読者ごとに読まれ方が違うことに戸惑っている、自分のオリジナリティを保ちながら査読を通すための方法がわからないなど、参加者からさまざまな「苦悩」が出されました。中には、査読コメントによって自分の研究を根本から否定されたような気持ちになり、果たして研究者を続けていいのだろうかと迷うところまで追いつめられている方もいました。その一方で、査読があることによって具体的なコメントをもらうことができる、研究をブラッシュアップできる機会になっている、何をどう伝えるかについてスキルを身につける機会になっているといった前向きな意見もありました。ほかにも各グループ内でさまざまな意見が出され、お互いに共感し合ったり、自分にはなかった考えに触れたりすることができました。

休憩を挟み、いくつかのグループから報告が行われた後、第2部の特別講演へと移りました。講演では坪先生から、機関誌の編集サイドにもさまざまな「苦悩と戦略」があるとのことをお話をいただきました。私が特に勉強になったと感じたのは、2018年に行われた編集委員アンケートの結果をもとにした話でした。ここでは、読み手を意識することや研究の作法に沿うこと、自分の論文に最適な投稿先を選ぶことが大事といったアドバイスがありました。また、他の研究者にバトンを渡せるように自身の研究の位置づけを明確にすることや、厳しい査読コメントを受けても落ち込まないようにメンタルケアすることが大切だとも仰っていました。さらには、査読者の代わりに「寄り添うそぶり」を見せることや、「あがいている様子」を伝えることも大事といった、ユーモアたっぷりの助言もいただきました。

質疑応答で、査読コメントの指摘の中にどうしても自分として譲れないポイントがある場合にはどうすればいいかという参加者からの質問に対し、きちんと主張したほうがいいと断言されていたことも印象に残った点でした。これまで私は、査読に対してネガティブな感覚が強かったのですが、研究者どうしでお互いを尊重し高め合うものだとわかり、捉え方が少し変わりました。査読のことを自分の前に立ちだかる壁のように感じ、自分と対立するものだと考えてしまっていたのですが、このような姿勢は間違っていたなあと反省もしました。

今回は、第1回のサロンよりも参加者が20人以上増えました。新型コロナウイルス禍は私たちにさ

さまざまな制約をもたらしましたが、一方でオンライン会議ツールの急速な普及という副産物もありました。私が参加したグループでは北海道と沖縄の方が一緒でしたが、このようにオンラインによって物理的な距離を超えて集うことができます。また、オンラインによるイベント開催は、大勢が集う場に参加することへの心理的なハードルも下げているような気がします。私は恥ずかしながら、対面でこのようなイベントが行われていた頃は、参加者はきっと社交性が高い人たちばかりなのだろうと思い、敬遠がちでした。CS-NETサロンは、私のような引っ込み思案な人間でも参加しやすいアットホームな場になっています。初期キャリア研究者の皆さん、ぜひ気軽に参加してみてください。きっと、共感や癒しや元気や心強さが得られると思います。